

2006年8月3日

東京女子大学

理事長 原田 明夫殿

学長 湊 晶子殿

DOCOMOMO Japan 代表

鈴木 博之

東京女子大学東寮建物保存要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認めその保存を訴えることを目的のひとつとする国際的な非政府組織の日本支部です。当該建物の存続が危ぶまれる旨の情報を得て、同建物の保存を要望いたします。先に図書館や講堂・礼拝堂などを中心とする貴大学キャンパスのアントニン・レーモンドの設計した全ての建築物をDOCOMOMO Japanの100選のひとつに選定させていただき、そのお知らせをお送りしておりますが、今回あらためて当該建物の歴史的価値を確認させていただくべく、本書を差し上げます。

ご承知のように、貴大学東寮は、鉄筋コンクリート造地上2階建ての建物で、竣工は1922(大正11)年です。設計はアントニン・レーモンド(1888-1976)です。レーモンドはチェコ出身のアメリカ人建築家で、のちに20世紀の建築界の巨匠になったフランク・ロイド・ライトに誘われて1919年に来日し、その後も、戦時中をのぞき、主に日本で設計活動を行った建築家です。貴大学東寮はレーモンドの最初期の作品のひとつですが、貴大学の創立者の高い志をもとに、当時の最新のデザインとユニークな構造計画を重ねて建てられたもので、建築史上および技術史上において注目される建物です。

この建物の歴史的・建築的価値は下記の2点に認められます。

1) アントニン・レーモンドの初期の作風をよく伝える建物であること

東京女子大学東寮は、レーモンドが日本で独自に設計活動をはじめた直後に設計したもので、彼の最初期の作品の一つです。この時期のほかの作品は、星商業学校(現・星薬科大学、1924)以外には残っていないと思われるので、いまや彼の初期の設計のやり方をうかがわせる貴重な例といえます。

よくご承知のように、貴大学キャンパスは、アメリカのプロテスタント諸教派の資金援助をもとに建設されました。当初の角筈から現在地に1924年に移転するに際し、まず寮から建設を始めたことに創立者の理念の一端が伺えます。それは当時の日本においては革新的であった、近代的な女子高等教育の場とするという意識の具現化でもあるということです。キャンパス計画はレーモンドが立案したわけですが、彼は創立者の高い志を形にするべく、正門奥に図書館を「知」を象徴するものとしてキャンパスの中心に置き、その前庭の両側に教師館や講義室棟、講堂・礼拝堂を配し、そして図書館の向かって左奥の空地に体育館や広大な寮を計画しました。寮で実現したのは東西寮だけですが、煙突をシンボルトワーに見立て、そこにアイロン台や洗濯室、ボイラー室を置き、そこから寮につながる翼部に食堂と集会室を設け、その先に寮を配しました。つまり、公共性の高い空間からプライベートな空間へという、明快なヒエラルキーをもとに設計したわけです(建物の棟高もそれに対応して設定されています)。この配置計画は熱エネルギーを効率よく利用するという、レ

ーモンド流の合理主義の現れでもあります。この寮で注目されるのは、鉄筋コンクリート造でつくられたこと、1人用の個室群で構成されていることです。それまで大学の寮を鉄筋コンクリート造でつくった例は日本には見られず、その後も、学習院昭和寮(現日立目白クラブ、1928)や第一高等学校寮(1933,34)、慶應義塾予科寄宿舎(1937)が数えられる程度です。東寮の場合は、規模が大きいだけでなく、個室群で構成され、しかもそこにはラジエーターやパーラーまで設置されていたということですから、ここにも貴大学の創立者の理想の高さがはっきりと示されていたわけです。そして、その廊下では土足歩行を想定していたのも当時の日本のこの種の建物としては驚くべきことで、近代的な住まい方を意識していたことが伺えます。

さらに、その外観も注目されます。柱間の窓の方立を五角形断面にしてその稜線を立面に表して縦線の数を増やし、その頂部を張り出した水平の軒で引き締めることによって、品格の感じられるデザインにしています。このような稜線を強調するやり方は、当時チェコで流行していた「チェコ・キュービズム」といわれる建築デザインの流れに沿ったもので、レーモンドのこの時期の作品の特徴の一つであり、同時期のほかの日本人建築家の作品にはみられない、貴重なものです。

2) 当時の鉄筋コンクリート造の技術をよく示すだけでなく、レーモンドのユニークなアイデアが込められた建物であること

この建物では1階床スラブも鉄筋コンクリート造にしたり、2階床スラブをかまぼこ形の金属板を型枠にしたヴォイドスラブにしているらしいこと(すでに取り壊された西寮にみられたやり方で、東寮も同様と考えられます)、2階上の軒を張り出して外壁の水平剛性をとろうとしていることなど、当時の日本の鉄筋コンクリート造技術には一般的ではなかったやり方が見られます。おそらく、1、2階の床スラブを鉄筋コンクリートで堅め、それで水平剛性を確保するというのがこの建物の構造計画の基本方針で、それによってより少ない材料で、経済性にも配慮した建物をつくらうとしたことが想像されます。レーモンドは技術、それも特に鉄筋コンクリート造に新しいデザインの可能性を見ていた建築家であり、チェコのプラハ工科大学では構造技術もきちんと学んでいるので、上記のようなやり方はレーモンドのアイデアと考えられます。構造とデザインを一体的に処理するという、当時としてはユニークなアプローチは、図書館の、正方形平面の4隅に柱を4本正方形をなすように配したメガストラクチャー(それによって、1本あたりの柱断面を細くできる)を利用して大きな柱間を軽やかに飛ばしているところなど、貴大学のレーモンドの建物の各所に認められます。東寮では屋根スラブが設けられていないので、上階の壁は2階の床からキャンティレバーで出るといった構造になっています。これも当時の鉄筋コンクリート造にはあまり見られないやり方ですが、レーモンドのことなので、彼なりの構造合理性から導き出された構造計画と見られます。また、玄関庇では見付けを薄く見せるため、剛性を保つための小さな梁を端から少し内側に入れて、つまり下からは見えないうにしているところなどにも、建物全体を軽快に見せようという意識が感じられます。これも鉄筋コンクリート造の特性を利用して、軽やかな表現を実現しようという彼のデザイン・コンセプトの反映と見られます。つまり、鉄筋コンクリート造という、当時としては新しい技術の特性を理解したうえで、それを軽やかなデザインにまで昇華させたもので、設計レベルの高さが感じられます。

以上のことから、当該建物は、文化的意義と歴史的価値を有する貴重な遺産と考えられます。日本近代を代表する、このかけがえのない建築遺産が後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。もし求められれば、本会は、この建物の保存・活用に際して、建築の専門家という立場から助言をさせていただき所存であることを申し添えます。 敬具